様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　４　月　２０　日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５９２６４９
研究課題名（和文）認知症高齢者にみるおだやかさの探求

研究課題名（英文）Investigation into psychological well-being observed among elderly persons with dementia.

研究代表者
小泉　美佐子（KOIZUMI　MISAKO）
群馬大学・医学部・教授
研究者番号：５０１７０１７１

研究成果の概要（和文）：①認知症高齢者のおだやかさスケールの開発：認知症高齢者のおだやかさを評価するスケール（以下ＯＳ）を開発した。ＯＳは「周囲との交流」、「自分らしさの発揮」、「満足・活気」、「活動の楽しみ」の３領域、２４項目から成る。2010 年には、項目を精選してＯＳ20 項目を作成した。②認知症高齢者のおだやかさと認知症レベル、性格との関連についての予備的研究：OS スケールでおだやかであると判定された認知症高齢者 9 名について、臨床認知症基準（CDR）、Big Five 性格評価スケールを用いて病前と病後の性格との関連を調査した。

研究成果の概要（英文）：①Development of ODAYAKA Scale for Elderly Persons with Dementia: We Developed ODAYAKA Scale(OS) for elderly persons with dementia. OS is an instrument to estimate of psychological well-being for elderly persons with dementia, and the scale is composed of 24-item in 3 domains; ‘interaction with people around them’, ‘expression of their own individuality’, ‘satisfaction and vigor’. We make up OS20-item scale which selected from OS24-item scale in 2010. ②Pilot study of relationship between psychological well-being, clinical dementia progress and the characteristic of their personality：We examined Clinical Dementia Rating (CDR) , and Big Five scale among 9 elderly persons with dementia getting a high score of OS24-item scale.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：認知症ケア
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：認知症、高齢者、おだやか（Well-being）、スケール

１．研究開始当初の背景

‘認知症のパーソンセンタードケア’を著した Kitwood は、認知症の理解について２つのパラダイム、すなわち古い文化と新しい文化による観方を提示した。古い文化による認

知症の理解は「人格と自己が進行的に破壊される中枢神経系の恐ろしい病気である」に対して新しい文化による観方では、「認知症状を示す病気は、第一に障害とみなすべきである。どのような症状をもつかはケアの質に決定的に依存する。質の高いケアが提供される状況下では、認知症になってもかなり良い状態を保つことができる。といったより前向きな観かたに根拠を与える研究が未だ断片的ではあるが出始めている」と述べている。認知症ケアの臨床において、認知症を患っても比較的おだやかに過ごす人、あるいは状態に遭遇する。このような経験的事実を踏まえて、認知症になってもおだやかに生活できる人、状態があることを研究により明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

(1) 認知症高齢者の穏やかな状態（Well-being）をとらえるおだやかスケール（ＯＳ）の開発し、スケールの信頼性、妥当性を検証する

(2)認知症高齢者のおだやかさと、認知症のレベル、性格との関連を明らかにする

３．研究の方法

(1)認知症高齢者のおだやかスケールの開発と信頼性、妥当性の検討

介護施設を利用する 65 歳以上の認知症高齢者 122 名を対象として、施設職員に依頼して辻村、小泉が開発したＯＳ24 項目(2 週間おいて 2 回測定)、Robins らの「アルツハイマー病患者の QOL 評価スケール」(AD-HRQL-J)、Greene らの「行動感情障害スケール」(BMD)を用いて行動観察評価を行った。おだやかスケールの信頼性の分析は、因子分析によりサブカテゴリーを抽出、スケール全体と下位領域の alpha 係数を算出し内的整合性を調べた。再テスト法による一致率は Speaman 相関係数を求めた。構成概念妥当性の検討は AD-HRQL、BMD スケールとの相関を調べた。解析には統計パッケージ SPSS11.0J を使用した。

おだやかスケールは認知症高齢者の行動観察によるもので評価者間一致率の信頼性の検討が問題であったため、高齢者介護施設を利用している認知症高齢者 39 名を対象に、高齢者 1 名に対して 2 名の介護職員による評価を実施し、評価者間一致率を求めた。その結果から一致率が 30%台の低い項目を 5 項目削除し、外からの行動観察により評価しやすい表現に変えた。また、Kitwood の認知症高齢者のよい状態（Well-being）の指標の中から 1 項目追加しておだやかスケール 20 項目を作成した。

(2)認知症高齢者のおだやかさについて、認知症のレベル、性格との関連についての予備的研究

OS24 項目を用いて認知症高齢者のおだやかさをとらえ、認知症レベルと性格との関連を明らかにする目的で予備的研究を実施した。通所リハビリ、認知症高齢者共同生活介護（グループホーム）を利用の高齢者 36 名を対象に OS24 項目、臨床認知症基準(CDR)について評価した。OS24 項目評価（96 点満点）で 3 分の 2 以上にあたる 64 点以上をとった対象をおだやかであると評定し 12 名(全体の 33.3%）をスクリーニングした。次に家族に研究の同意が得られた 9 名について家族からの聞き取り調査を行った。調査は、①Big Five 性格尺度を用いて発病前と現在の性格傾向を評価、②発病から現在に至る経過、精神的に不安定な時期はあったか、いつ頃からおだやかになったかなどについて質問し回答を得た。

４．研究成果

（１）おだやかスケールの開発

ＯＳ24 項目の信頼性、妥当性の検討について、スケール全体の信頼性 alpha 係数は 0.95、3 領域の「周囲との交流」0.92、「自分らしさの発揮」0.90、「満足・活気」0.89 であり、再テスト法による相関係数は 0.96 であった。全体、領域間の内的整合性は 0.9 以上あり、再テストの一致率も高く信頼性が検証された。ＯＳ24 項目と AD-ARQL との相関 0.84,BMD との相関-0.74 であり、認知症高齢者の well-being を評価するスケールとしての妥当性が検証された。

しかし、本スケールは他者からの外部評価によるところから評価者間一致率の信頼性の検証に問題を残した。評価者間一致率を高め、また、Kitwood の認知症高齢者の Well-being の指標をもりこんだおだやかスケール 20 項目を 2010 年に作成した(表１)。その信頼性、妥当性については現在、解析中であるが、因子分析によって 3 領域に分かれ、以前に「満足・活気」とした領域は、打ち込める何かがある、セルフケアを行えることに満足して精神的な安定を得ている内容の項目から構成されているところから仮称「充実した暮らしぶり」と命名した。

（２）認知症高齢者のおだやかさと認知症のレベル、性格との関連について

認知症高齢者のおだやかさと認知症レベルとの関連では、CDR による評価で、0.5（認知症の疑い）3 名、1（軽度）4 名、2（中等度）２名であった。また、性格傾向の変化については、外向性 3 件（病前 7 件)、開放性 2 件（2 件)、神経症傾向 1 件（1 件)、協調性 1 件（1 件)、誠実性 1 件（3 件）で、発病前から外向性が高いのが特徴であった。発病後はいずれの性格特徴とも鈍化する傾向

が見られたが目立った変化はなく、家族は「性格は以前とあまり変わらない」と回答していた。精神的に不安定となった時期については認知症診断前後が２名、グループホーム入所後が３名、大きな変動はなかったが２名で、また、「性格というか体力が衰えておだやかになったと思う」が２名であった。

これらの結果から、対象がおだやかに生活している背景として、認知症が軽度（うたがいの段階を含む）から中程度の段階にあり自分らしさの発揮や好きなことに打ち込めること、性格との関連では、元来の性格が外交的であり現在もその傾向が保持されて、おだやかさの要素である周囲との交流、自分らしさの発揮、満足・活気に影響を及ぼしている可能性が示唆された。また、加齢による体力の衰えにより行動面で穏やかになり、現在の生活環境に適応していると考えられた。

表１　おだやかスケール 20 項目

周囲との交流（7 項目）
1. 周囲の人と交流がはかれる 2. 人の話を落ち着いて聞くことができる 3. 気のあう人と一緒に過ごす 4. 人のことを気遣える 5. ユーモアを楽しむことができる 6. 小さな子供やペットを愛しむ 7. 他者にやさしく接する
自分らしさの発揮（7 項目）
8. 昔話を楽しめる 9. 自分のペースで日課を過ごせる 10. 喜びと苦しみの両方の感情を表現できる 11. 好きなおしゃれ（化粧、髪型、服装、持ち物）ができる 12. 自分の意思や願を主張できる 13. 人間としての誇りをもっている 14. 笑顔で喜びを示す
充実した暮らしぶり（6 項目）
15. 他人のために何かができる 16. トイレでうまく排泄できる 17. 悲観的でなく前向きに過ごしている 18. 落着きがなく、緊張している（＊） 19. ゆっくりくつろぐことができる 20. 好きなことに打ち込める

（＊）は逆転項目

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①「辻村弘美、小泉美佐子、認知症高齢者のおだやかスケールの開発、北関東医学、査読有、Vol.60、No.2、2010、pp.119-134

〔学会発表〕（計４件）

① 辻村弘美、小泉美佐子、認知症高齢者のおだやかスケールの開発 -well-being の指標をふまえた改訂版スケールの作成-，日本老年看護学会第 15 回学術集会，2010 年 11 月 6 日、ベイシア文化ホール（群馬県前橋市）

② 辻村弘美,小泉美佐子、認知症高齢者のおだやかスケールの開発-評価者間一致率からの考察-，第 11 回日本認知症ケア学会，2010 年 10 月 23 日,24 日、神戸国際展示（兵庫県神戸市）

③ 小泉美佐子、小嶋稚佳、坂入和也、アルバム写真をとりいれた思い出ノートの作成とその有用性について、第 10 回日本認知症ケア学会、2009 年 10 月 31 日・11 月 1 日、東京国際フォーラム（東京都）

④ 小泉美佐子、木村麗菜、辻村弘美、坂入和也、認知症になってもおだやかに過ごす高齢者の特徴と背景－認知症のレベルと性格についての予備的研究、第 9 回日本認知症ケア学会、2008 年 9 月 27 日、サンポートホール高松（香川県高松市）

６．研究組織
(1)研究代表者
小泉　美佐子（KOIZUMI　MISAKO）
群馬大学・医学部・教授
研究者番号：５０１７０１７１

(2)研究分担者

辻村　弘美（TUJIMURA HIROMI）
群馬大学・医学部・助教
研究者番号：７０３７５５４１

坂入和也（SAKAIRI KAZUYA）
群馬大学・医学部・助教
研究者番号：８０３６１３６９
（２００８～２００９）